

チプリアーノ・デ・ローレ Cipriano de Rore (1514/15-65) は 16 世紀イタリアで活躍したフランドル楽派に属する作曲家で、とりわけマドリガーレ史において大きな功績を残した。16 世紀のマドリガーレは、次世代の様式を生み出すための言葉と音楽の相互関係に関する発展の原動力となっており、音楽の実験の場でもあった。その中でデ・ローレは、モンテヴェルディ Claudio Monteverdi (1567-1643) の弟、ジュリオ・チェザレ Giulio Cesare (1573-1630/31) がデ・ローレのことを「第 2 作法の創始者」と呼んだことで知られている。デ・ローレに関する研究は、後期作品における大胆な不協和音や半音階に焦点を当てた研究に集中し、初期から後期までを対象にした体系的な研究は未だにほとんどされていない。本論文では、これまで先行研究で指摘されつつも、焦点を当てられることのなかった「ホモフォニックな書法」に着目し、さらに初期から後期へのデ・ローレの作曲技法の変遷をマドリガーレ史の中で辿ることで、第 2 作法の研究に偏る彼の作品を新たな視点から考察しようとするものである。

本論文では、「全声部 (2 声部以上) が同じ音価で同じ単語を 1 単語以上発する」場合を、「ホモフォニーの使用」とし、ホモフォニーの使用が増加するとともに、定義をより拡大して分析を行った。分析結果から明らかになったことは、初期から後期に至るにつれて、ホモフォニーの使用が格段に増加するということである。初期は楽曲のほとんどを模倣的対位法で統一し、中期ではホモフォニーの意図的な使用が多く現れるようになる。そして後期では、楽曲の主体を対位法ではなく、ホモフォニックな書法とする作品まで残した。すなわち、デ・ローレは生涯の中で対位法からホモフォニックな書法へと明らかに転向していったのである。

デ・ローレの作品をより広い視点から考察するために、本論文では同時代の理論家におけるデ・ローレに対する評価についての章も設けた。特にカメラータの主要人物、バルディ Giovanni de' Bardi (1534-1612) とガリレイ Vincenzo Galilei (c. 1520-1591) による最大級の称賛は興味深い。この 2 人の評価に共通していることは、デ・ローレを多声音楽の頂点と見なし、それ以後の対位法音楽を徹底的に批判していることである。最終的にモノディー様式に向かった彼らにとって、デ・ローレのマドリガーレは言葉と音楽が最も結びついた「多声」音楽だったのである。

最終章では、デ・ローレが辿ったホモフォニックな書法への移行は、ルネサンスからバロックへの転換期を大きな意味でのポリフォニーからホモフォニーへの移行と考えるならば、また作曲技法の中心が対位法から和声法へと移行すると考えるならばどのような意味を持つのかを検討した。次世代の様式を生み出す原動力となったマドリガーレを中心とするポリフォニーの時代から、人文主義の中でモノディー様式が確立してオペラが誕生するまでの移行は、決して 180 度の転換ではない。音楽理論と音楽実践の狭間で、また模倣的対位法と人文主義の対立の中で、各々の音楽家は葛藤したのである。その中でデ・ローレのホモフォニックな書法への移行は、この時代を支配していた対位法からの逸脱の第一歩であり、それは 1550 年代後半に既に起こっていたという意味で、複雑に絡み合う転換期の一端を明らかにするものに成りうる。最後に、この転換期はさらなる研究の余地があることを指摘し、今後の課題とした。(2014 年、東京藝術大学)